情景（秋）

宮本百合子

秋の景色（十一月初旬）

○曇り日　日曜。ちっとも風がない。
○すっかり黄色くなった梧桐の葉、
○その落葉のひっかかっている槇の木の枝
○きのうの雨でまだしめっぽく黒く見えている庭木の幹。
離れの方から　マンドリンとピアノの合奏がきこえて来る。
◎ひどく雨が降っている。
○遠くの方で、屋根越しに松の梢がまばらに大き

く左右へはり出した枝を　ゆすっているのが雨中に見える。

○柿の木がすっかり葉をおとし、いくつかの熟した実を盛に雨にうたれている。

◎バスにのって戸塚の方へ出たら雨がザーザーふっている。バスの前方のガラスを流れている。降りる頃には　またやんでしまっていた。

◎芝居のかえり。初日で十二時になる（群盗。）アンキーとかいう喫茶。バーの女給。よたもん。茶色の柔い皮のブラウズ。鼠色のスーとしたズボン。クラバットがわりのマッフラーを襟の間に入

れてしまっている。やせぎすの浅黒い顔、きっち
りとしてかりこんだ髪。つれの女の子、チェック
ポタージュをのんでいる
のアンサンブル（赤、緑、黒的）黒いハンドバッ
グと手袋とをその男がもってやっている。このよ、
、た、ちっとも笑顔をせず。

「あっちへつけときましたから」

「おつけになって下さいましたの？」

「ええ」

〔欄外に〕

バアの女給。十二時頃 tea Room でポタージュを
たべ　トウストをたべる。ヴィンナ、トウストマ

ダムという女　朱　赤と薄クリームの肩ぬき的な
洋装、小柄二十四五位

夕方五時すぎ。
電車道のところを見るとさほどでもないが濠の側
を見ると、濃くもやが立ちこめて四谷見附に入る
堤が　ぼんやりかすんで見える。電燈（街）はそれにと
け込んでいる。
○電柱に愛刀週間［＃「愛刀週間」に枠囲み］の立看
板
◎右手の武者窓づくりのところで珍しく門扉をひ

らき　赤白のダンダラ幕をはり　何か試合の会か
なにかやっている
黒紋付の男の立姿がちらりと見えた。
○花電車。三台。菊花の中に円いギラギラ光る銀
色の玉が二つある
能の猩々。
子供の図
あとから普通の電車に赤白の幕をはったのがつい
てゆく。新議事堂落成祝のため。
〔欄外に〕

○皇太子の生れてよろこびの花電車（1933 の暮）春日町のところで会った。こちら自動車。ダーやられたとき　あの感じを思い出した。

遭遇の場面

○新響のかえり。銀座。男二人女一人
アラ！　ああやっと見つけたという工合だわ
　アミノ　と。
◎若松に入ってゆく、奥へゆく。右手に若い男二人
こっち側、あっち側に緑郎

鶴「いとこさんがいるよ」
見ると、しきりに何か喋っている
一人がしきりにこっちを見ている、
やがて気がつく。笑う。やがて緑　帽子をぬぐ。
(何か自然で、おとなしく　しつけよい感じ)
鶴「あのひともこの頃顔がなかなかしっかりして
来たね」
「うん、いろいろ書いてやっているからね」
林町の通りへ入ったら後からHead light、そうかな。
こっち止る、うしろも止る。すると緑が出て来てドア
を外からあけてくれる。そういうものごしの中にある

スラリとして細かいところ。

秋の夕映

午後五時頃、
　廊下へ出て見るとまるでつき当りの窓が赤い。
　　空を見ると
冴えた水色とすこし溷（にご）った焔のような紅色とが横
だんだらに空じゅうひろがっている。何だか他の
季節の夕やけのように光の暖みを感じられず　只
色どりの激しさのみ感じられ、変に不安を刺戟さ

れるような印象である。

その横まだらの空に　葉を半ば落したサイカチの梢がそびえている。

○十一月の或小雨もよいの午後四時。

暗いので部屋に灯がついている。

入った右手の安楽椅子のところに紀　ラクダ毛布を引かついで眠をぶっている。

㋜紫矢がすり　赤い友禅のドテラ引かぶって櫛の八の通っていない髪　青い半ぐつした。

室中に何とも云えず重い懶い雰囲気がこめている。

その同じ娘が　人中では顔も小ぢんまり　気どる。
スースーとモダン風な大股の歩きつきで。
それに対する反感。

十一月初旬の或日

やや Fatal な日のこと。
梅月でし、る、粉をたべ。
午後久しぶりでひる風呂、誰もいず。髪をあらう、
そのなめらかな手ざわりのなごやかさ。

日当ぼっこ、髪かわかしカンヴス椅子
柿モギの声　昔の家のことを思う

夜。暗い屋敷町
歩いている男　ホームスパン的な合外套の襟を立
てて靴の音、
横丁から出て来た犬と少女。すぐつづいて男と女。
ずっと歩いていて、煙草のすいガラをパッとすて
た、火の粉が暗い舗道の上に瞬間あかるくころがる。

夕暮。もう家のなかはすっかりくらい。留守で人の

居ない庭へ面してあけ放たれている　さっぱりした日本間。衣桁の形や椅子の脚が、逆光線で薄やみの中に黒く見える。つめたいさむさ。土の冷えが来るような庭のしめり。

○西日のよくあたる梢の上かわだけ紅葉しているもみじ。

○すっかり黄色い七分どおり落ちた梧桐、

○銀杏の葉のふきだまりが土蔵の横に出来ている。

○便所にいる。

　ギャーギャーとまるで　お上でものをいうのとはちがった声色で　ふざけ笑っている女のこえ。

午後

サイレンはついききおとしたが　方々の寺で鐘がなり、それに合わせるように　裏通りで　豆腐屋のラッパがしきりに鳴る、そういうあたりの活気をひろ子は物珍しく感じた。

頭をあげて　そとを見た。

曇った日

となりで

アアちゃん

という声、シャラシャラおまつりのたすきに鳴る
ような鈴の音がしている。

或女の人相

そのひとはどこが変っているというのではないが
目玉が丸く黒くなったようで　瞼の間にある艶やかさ
が　ぬけてしまっている。寂しく不安なような表情、
紅がついている小さい口がよく動き　たっぷりした頬
に白粉があるだけ却って。

底本：「宮本百合子全集　第十八巻」新日本出版社
1981（昭和56）年5月30日初版発行
1986（昭和61）年3月20日第2版第1刷発行
初出：同上
入力：柴田卓治
校正：磐余彦
2004年2月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。